

媒体名: バチバチ

日付: 2006年10月

KO・DA・WA・RI—Taiko



渡辺洋一 (わたなべ・よういち)

太鼓集団「天邪鬼」の主宰・渡辺洋一が語る  
音と振りが一体となる打法とは

「振りで音が見える」  
そう言われることが多いという。太鼓集団「天邪鬼」の振りは、重やかで、美しく、切れが良い。同時に太鼓の芯をとらえた音も実現している。この振りと音とのバランスはいかにして生み出されたものなのか、主宰の渡辺洋一に聞いた。

「幼い頃、ハッピー姿に憧れて、盆踊りの太鼓の手ほどきを受けたのが太鼓との出会いです。近所の少林寺拳法と空手の先生に、朝夕、稽古をつけてもらい、その時に言われた“腰を入れて”という言葉を盆踊りの太鼓を打つ時に実践し

てみると、とても良い音が出た」

そう幼少時の経験を語る。さらに、助六太鼓に入門、江戸囃子も学び、日本舞踊、長唄、ラテンパーカッションなど様々な音楽や芸能からそのエッセンスを学びとった。

「伝統を吸収したあと、それを一度壊し、新しいものを作りたい。音と振りが一体となる打法を目指してきました」

まず、太鼓を打つ構えの状態が大切なことは、“腰を入れた”状態で上半身の力を抜くこと。

「たとえば、ボールを投げるとき、“腰を入れ”て全身を使わないと速くまで飛ばないでしょう」

実際に打つ時には、手首、肘、肩、腰、膝の5関節すべてを使うことが大切。また打面から3cmほど奥を打つイメージで打ち抜く。

「声を出す時、体に共鳴させるように太鼓の胴も響かせ、裏革まで共鳴させることで遠くに響かせることができる」

さらに、バチを打ちおろすとき最大に加速させ、打った瞬間に力を抜く。

振りは、観客に受けようという発想からではなく、太鼓を打つために必要な動作を、より粋に美しく見せるというところから編み出されたものだ(写真①・②)。

「例えば『武人』(写真③)という曲では、バチを刀に例えています。イメージにあう振付をしたら、それを実際に何時間も自分で打ってみる。そこで自然な振りができ上がってきます」

かつては様々な楽器とセッションを行い、和太鼓をパーカッションのように使ったこともあった。だが、「和モノの本道の良さをわかってもらえないし、心から熱くならない」ことに気づいた。

「今の若手の太鼓は、技術はとて優れているが、グルーブが成立しておらず、無機質に感じる人が多いですね。洋譜でやっているからだと思います。フォルテシモかピアノシモの両極端な音しかない」

どうすれば良いかと尋ねると、「昔からの口唱歌で唄いながら稽古をし、リズムや間合いを体にいれること。例えば盆太鼓を打つなら盆踊りを知らない」と

パフォーマンスのための振りではなく、次の音のための振り、それを自然に身にしみ込ませて打ち出す音。そこには職人が技を磨くようなこだわりがあった。



①「怒濤」: 女性のびやかな振りが美しい



②「神楽」: 左の地打ちに合わせて中央の渡辺がソロを打つ。



③武人(ぶじん): バチを刀に例え、最初から最後まで武人のストーリーが太鼓で語られる

●プロフィール

東京都荒川区生まれ。幼少から盆踊りの太鼓に親しみ、1976年に助六太鼓に入門、10年間活動する。86年に太鼓集団「天邪鬼」を結成し、日本人の心と江戸の粋を根源に新しい和太鼓音楽の確立を目指す。03年、文化庁より特別顧問・文化交流使に任命され、積極的に和太鼓を広める活動を行う。

こだわりデータ

- 影響を受けたアーティスト=藤倉清成、仙波清彦
- オスムのオリジナル曲=武人

(有)太鼓集団天邪鬼

〒177-0035 東京都練馬区南田中 5-9-11-101

TEL:03-3904-1745 FAX:03-3904-9434 E-Mail: taikoshudan@amanojaku.info

http://amanojaku.info